

論文番号 71

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Alcohol and survival in the Italian rural cohorts of the Seven Countries Study

セブカンTRIESスタディーのイタリア農村部コホートにおける飲酒と生命予後の検討

執筆者

Farchi G. Fidanza F. Giampaoli S. Mariotti S. Menotti A.

掲載誌 (番号又は発行年月日)

International Journal of Epidemiology. 29(4):667-71, 2000

キーワード

Alcohol, survival, cohort study, men, Italy

アルコール、生存、前向き研究、男性、イタリア

要旨

背景

中程度の飲酒習慣のある壮年期の総死亡は、禁酒者や多量飲酒者と比べて低いことが知られている。この研究は喫煙習慣と生活活動度を調整した上での飲酒習慣と生死の状況との関連をみたものである。

方法

1965年に45歳から65歳までのイタリア男性1,536名に対して、健康に関する一般的な質問、血液生化学検査、心電図、血圧、飲酒習慣を含んだ食事調査を行った。1965年から1995年の前向き研究である。

結果

30年間で1,096名が死亡した。年齢調整をした後の平均余命は、1日の飲酒量が63g(4~7杯の飲酒)の者が 21.6 ± 0.4 年であり、3.7g(1杯以下の少量飲酒)群や10g超(多量飲酒)群と比較して約2年長いことが分かった。喫煙習慣を加味すると、非喫煙で1日63g(4~7杯の飲酒)の群が 22.4 ± 0.5 年と最も長かった。最も短かったのは喫煙群で10g超(多量飲酒)群であり、 18.5 ± 0.7 年であった。最も長かった 23.4 ± 0.7 年というのは、重労働者で1日の飲酒量が1~4杯の群であった。

結論

97%がワインを飲み、そのほとんどが赤ワインであるイタリアの前向きコホートのデータを用いて、生命予後と飲酒習慣との関連を明らかにできた。その結果、45歳から65歳の年代では、1日の飲酒量が5杯の群が、多量飲酒群や機会飲酒群よりも生命予後が長いことが示唆された。